PROJECT

西欧キリスト教的聖概念の再検討

文
杉本良男

共同研究 ● 聖地の政治経済学──ユーラシア地域大国における比較研究（2013-2016 年度）

本共同研究は 3 年目にあたり、対象の 3 地域を横断する研究会 3 回と、総括討論を 1 回実施した。本年度はとくに、当初から研究会の幅を広げるために、積極的にメンバー外の研究者の招聘や、他プロジェクトとの公開連結研究会を実施した。

聖地をめぐる基本概念の再検討

1 回目の研究会は、2015 年 4 月 11 日（土）に民博で開催された。この研究会は、杉本良男の報告と、共同研究の中間考察として、これまで棚上げにしておいた基本概念の整理を行った。杉本は、「廃墟の聖地化──南インド・タミルナードゥにおける宗教空間の再編」において、インド、タミルナードゥ州中央部の 1 村落ティルップランビヤムにおける現地調査資料をもとに、2000 年代に入って農村部で、さまざまな規模のヒンドゥー寺院がつぎつぎと再建されている実情と、それが、いったん村外に出て再び戻ってきた人など何らかの意味で外部性を帯びた、それも個人の篤志によって実現していることが指摘された。とくに、廃墟化していた寺院が、近くの地方都市クンバコーナムの教団や、州内の聖地で結ばれたネットワークなどが関与することで、大々的に再建され、ついには観光地化した経緯について報告があった。

次いで、聖と聖性、場所と空間、巡礼と観光などの基本概念について、全員で中間的なまとめを行った。とりわけ、分析概念としての場所と空間については、社会学、人類学、宗教学など、それぞれの研究分野において微妙に異なっていることが指摘され（河合、前島）、また巡礼と観光については、とくに西欧的な意味での聖・俗のあわいにある、旧ソ連における宗教施設のリバイバルや中国における偉人信仰と巡礼の聖地化などが、聖、聖性概念の再検討にまで関わることが指摘された。この点は特に、社会主義圏における宗教をめぐる諸概念により、西欧キリスト教的概念の根本的な再考を促すという、本共同研究の最終的な目的に対するきわめて重要な指摘であった（韓、高橋、小林）。そして、昨年度より問題になっていたもっとも基本的な聖と聖性の概念について、中世宗教人類学を標榜するシュミットの議論をもとに、西欧キリスト教的伝統に偏ることなく、それぞれの時代、地域における概念把握の実情を反映した検討が必要であることが指摘された（杉本）。

宮城学院女子大学との公開連結研究会

2 回目は、2015 年 6 月 13 日（土）に仙台の東北大学で開催された。本会は、八木祐子（宮城学院女子大学）が主催する宮城学院女子大学キリスト教文化研究所の「多民族社会における宗教と文化」研究グループとの共催で、公開の研究会として実施された。川口幸大（東北大学）の「中華民族の聖地と我々の聖地──黄帝・炎帝陵から村開祖の墓まで」では、広州市郊外農村における現地調査資料に基づき、祖先祭祀という営為によって、家族レベルから宗族（lineage）、広東祖（higher-order lineage）、クラン（clan）、そして民族始祖レベルまでを連続的にとらえ、整理のために「聖地性」と「当事者性」という 2 つの指標を設定し、規模が拡大するとともに、当事者性が減じて聖地性が前面に出てくる傾向があることが指摘された。とりわけ、「五帝本記」の黄帝伝説に結びつけられた民族始祖レベルの祖先祭祀は、中国の政体が変わるとともに意味が変化し、清代に漢族の始祖だったものが民国時代には中華民族の始祖への祭祀とされるようになり、さらにその故地が「中華聖地」として整備されて観光化が進んでいる実態が報告された。ここで、家族レベルの祖先祭祀から中華聖地

聖者ゴーヴィンド・プラブを祀る寺院（インド・マハーラーシュトラ州リッダプル、2015 年 8 月、井田克征撮影）。

「中華民族の始祖」とされる黄帝の像に跪く女性（中国鄭州黄帝故里、2013 年 11 月、川口幸大撮影）。

古木に対する崇敬（ロシア連邦カルムィク共和国ハルブルク村、2007 年 6 月、井上岳彦撮影）。

化された国家レベルの祭祀までが縦断的に結びつけられているという指摘は、最近亡くなられた伊藤幹治の『家族国家観の人類学』（ミネルヴァ書房、1982 年）の議論を想起させる。それが現代中国でも連綿と生き続けている点が注目される。

柳沢究（名城大学）の「ヴァーラーナシー（インド）における融合寺院に関する研究」は、インドでもっとも有名な聖地ヴァーラーナシーにおける、既存のヒンドゥー寺院の建物を核とした増築現象、柳沢の言うところの「融合寺院」について、それを都市の歴史の記憶装置として位置づけようとする意欲的な報告であった。柳沢は建築学の観点から幅広い研究活動を続けているが、インドの聖地、寺院などについても現地調査を実施し、多くの成果を発表している。事前に八木による聖地ヴァーラーナシーの概要の説明があり、その後柳沢による融合寺院の実態についての綿密な調査の成果が報告された。とくに、寺院の聖性と生活者の日常性とがせめぎ合うなかで、特異なかたちをとる融合寺院の実態は興味深く、またそれがヴァーラーナシーにほぼ限られた現象であると考えられることからも、第一級の聖地における聖・俗の関係について考察する上での貴重な資料となっていた。

この研究会は、宮城学院女子大研究プロジェクト関係者だけでなく、関連分野の研究者や、大学院生など都合 30 名ほどの参加者を得た。前年の北海道大学での研究会に続いて、研究の公開性と、研究者の交流という面で十分にその実をあげた。

聖地の復興

3 回目は 2015 年 11 月 29 日（日）に民博で開催され、ともに特別講師による報告であった。井上岳彦（北海道大学）「『仏教リバイバル』について考える――ポスト社会主義カルムィキアの事象から」は、ロシア南部カルムィキアにおけるポスト社会主義の仏教リバイバルについての報告であった。いわゆるカルムィク人はロシア領内に残ったオイラトであり、チベット仏教を維持するなど、その歴史は非常に複雑なものがある。それだけでなく、ソ連時代にほとんど見る影もなく消滅しかかっていたチベット仏教が、ソ連崩壊後復活するが、しかしその複雑な歴史を背景に、元の姿を取り戻すことが困難な状況にある。そうしたなかで、聖地の再興が仏教の復興にとって有効な方法として実をあげていることが指摘された。カルムィクの例はロシア領内での仏教の再興という二重三重の困難を抱えているが、一昨年度の高橋沙奈美（北海道大学）、後藤正憲（北海道大学）の報告で取り上げられた宗教の復興と構造的に同質性が見られるところが注目点である。

井田克征（金沢大学）の「聖地と物語――現代インドにおけるマハーヌバーヴ派の事例から」は現代インドの聖地を取り上げるが、文献学者の井田は、古典文献と照らし合わせながら、特徴を整理した。とくに文献における聖地と物語の相互運動に関して、いずれも同じ聖地を意味するティールタと、ビータ、クシェートラとの 2 つの類型があることを指摘した。その上で、川と結びつき贖罪の意味を持つティールタの現代的展開の事例として、マハーラーシュトラ州マハーヌバーヴ派の伝統と、聖地が再発見され、再構築されるプロセスとその背景についての事例報告があった。結論部分で提起された、なぜ復興されるのが「聖地」でなければならないのか、という問題設定については、同じインドや、他の地域との幅広い比較の重要な視点を提供している。それは、聖地の聖性は、おのずから現れるのか、それとも一旦社会的に構成された聖性が持続性を持つのか、という古くからの聖性研究の根本的な問題に到達するからである。

2016 年 2 月 29 日（日）は、天候不順により北海道勢が参加できず、予定を変更せざるを得なかった。そのため参集したメンバーによって今後の方針を協議した。なお、北大スラブ研で同趣旨の共同研究会が採択されたので、来年度は北大との交流をさらに緊密化する方針である。

ここまで、聖地の政治経済学的考察については、それぞれの報告から現代的な状況が浮き彫りにされるとともに、西欧キリスト教的聖概念の再検討についても、ユーラシア地域大国という研究枠組みのなかでの比較研究によって、十分な結論を導き出せるめどがついたところである。

すぎもと よしお

国立民族学博物館名誉教授。専門は社会人類学、南アジア研究。南アジアの宗教・文化ナショナリズムの研究に従事している。著書に『スリランカを知るための 58 章』（共編 明石書店 2013 年）、『キリスト教文明とナショナリズム――人類学的比較研究』（編著 風響社 2014 年）、『スリランカで運命論者になる』（臨川書店 2015 年）などがある。